

幽霊船

主要登場人物

グレイチェン・ヘルクスハイム

Get Chen Heixheim (Margareta von Heixheimer)

同盟軍士官学校三年生。戦略研究科首席生徒。一年繰り上げ卒業し、メルカルト星域JL二七基地に赴任する。金髪と紫水晶の瞳の女性。亡命者。亡命の際に、ラインハルトとキルヒアースと面識を持つ。

ティフリー・ブランドン

Tiffany Brandon

同盟軍士官学校三年生。戦略研究科次席生徒。一年繰り上げ卒業し、メルカルト星域JL二七基地に赴任する。クルーカットの髪型。頑丈な体つき。生真面目な青年。

ヒラーデ

Joe Geruda Harada

同盟軍大佐。JL二七駐留艦隊参謀長。アムリツシアの生き残り。アムリツシアで艦を失い、一人生き残ったために軍から冷遇され、その恨みから亡命者であるグレイチェンを偏執的に憎悪する。

ハイデンスタム

Rupert Heidenstam

同盟軍大尉。グレイチェンの直属上官。JL二七駐留艦隊の作戦先任参謀。

テスニエ

Marius Taisnier

同盟軍大尉。ブランドンの直属上官。巡航艦『フィラデルフィア』航法士官。

モリナーリ

Ardeco Morath Anastasio Emanuel e Molinari

同盟軍准将。JL二七基地司令官。

ルドニコフ

Stefan Leonovich Rudnikoff

同盟軍大佐。JL二七駐留艦隊司令官。

ベンドリング

Wenzel Heinrich von Bendring

元帝国軍少佐。現同盟軍大尉。グレイチェンの後見人。

「宇宙曆七九八年度、自由惑星同盟軍士官学校卒業生代表、ティフリー・ブランドン！」

短くしたクルー・カット、フットボール選手を思わせる幅の広い頑丈な体つきが起立し、演壇に向かう。その背に向けたグレイチェンの視線は複雑だった。その名を呼ばれ、卒業生総代として演壇に向かうのは、本来なら彼女の役割であるべきだったのだから。

グレイチェン・ヘルクスハイム。宇宙曆七九八年で一九歳になる……というのは亡命した時の詐称で、実年齢はまだ一七歳に過ぎないのだが、同盟軍士官学校三年生。士官学校最難関を謳われる戦略研究科三年生。

同盟軍士官学校は、本来四年制である。従って、三年生の彼女は卒業生見送る方でありこそすれ、自らが卒業生として送辞を受けるべき立場ではないはずだった。

士官学校の教育年限を一年短縮し、四年生と三年生を同時に士官候補生として宇宙艦隊に増員する。苦渋の判断だったとも伝えられるし、士官学校校長を勤めたこともあるシトレ退役大將などは猛反対したという。

「いかに同盟が苦況であるとしても、そのツケを若者に負わせてはならない。彼らを同盟軍士官として、また、それ以前にひとかどの人間として教育しおおせるためには最低限度四年間が必要であるとして、今の士官学校があるのだ。そもそも今の我が国の状況は政治の愚かさが招いたものでこそあれ、彼ら若者の責に帰すべきものは余りに薄い。にもかかわらず、単に士官が足らぬと

いうただそれだけの理由で、彼らから受けるべき教育の機会を奪うなどという暴挙が許されて良いものではない」

苦境。そう、確かに自由惑星同盟は、建国以来最大の苦境に立っていた。シトレ元大將の指摘通りに、まさに政治の愚かさの代償として。

宇宙曆七九八年……ということは帝国曆四八九年ということになるか。亡命してからもう七年を、この『自由の国』とやらで過ごしてきたことになるか。言葉やその他はともかく、曆に関してはまだ帝国曆に換算しないとピンと来ないのだ。

自由惑星同盟を一挙に存亡の危機に突き落とす最大の原因となったアマリツツア宙域会戦は二年前。同盟軍は制式艦隊兵力の七割をこの戦いで喪った。あの金髪の若者は、同盟軍にとってまさに死の大使と化して、『同盟国防省にとって絶望の六時間』を演出して見せたのだ。

失われた二〇〇万人以上の人命と膨大な艦艇、資材。『二〇年をかけて育てる』とされる艦長クラスの中堅士官も、現役士官の八割近くが遂に帰らなかつた。通常、三割の人員減で機能を喪失するとされる人的組織にとつて、末端で七割、その中間層で八割の構成員を失うことは、そのまま崩壊を意味する。

士官学校を初め、同盟軍の主宰する各種学校の定員枠が大幅に拡大され、教育コースは短縮され、何もかもが速成化された。士官学校に入学したばかりだったグレイチェンたちも、休日と自由時間のほとんどを削られ、課業への充当を強いられたのだ。

アマリツツアで蒙った損失は、自由惑星同盟にとつて回復不能なほどの深さだった。戦死傷者への年金と弔慰金、補充艦艇の建造に要する巨額の費用が国家の体力を限界まで絞り尽くした結果として、新たな人材を養成すべき費用が逼迫した。更に、民生に向ける国費もその余裕を失い、対帝国の軍事作戦に優先度を与え

ることによって、辺境宙域のみならず同盟領の中枢部の航路ですら、安全の確保は万全ではなくなつた。費用を捻出すべく税金を引き上げれば、経済活動そのものが縮小の一途を辿つてしまう。開発途上、あるいは辺境の星域に投資して経済規模の拡大を図るうにも、そのための費用がすでに枯渇している有様なのだ。

ゆえに、シトレ元大將や、その他の『有識者』がいかに嘆こうと反対を表明しようと、卒業年度の繰り上げを避ける術は何処にもなかつた。

とは言え、壇上で答辞を読み上げる卒業生総代……戦略研究科の首席生徒が、その役を担うのが決まりだつた……を見上げるグレイチェンの視線を驚らせるものは、同盟のそんな事情ではない。ブランドンは確かに優秀な生徒だつたが、三次生徒の戦史研究科首席生徒は、実は彼女だつたからだ、

卒業の繰り上げと、卒業式の日程が決まつた時、グレイチェンは校長のシェフェール中将に呼び出され、繰り上げ卒業生徒の総代をブランドンに譲るように命じられたのだ。

「私が亡命者だからでしょうか」

グレイチェンは激昂はしなかつた。毛を逆立てた猫科の猛獣めいて光る、^{アマニスト}紫水晶の瞳に凝視されたシェフェール中将は、落ち着かなげに視線を宙にさまよわせたのだ。

「聞き給え、ミス・ヘルクスハイム。ここは自由の国だ。信条や出身で処遇を左右されるなどと言うことはあつてはならぬことなのだ」

「では、何が理由でしょうか。理由を聞く必要がないと言つことであれば、こうして出頭をお命じになる必要もないことと思ひますが」

「いや、つまりだな……今回のこの命令は、君の出自に対して何

らかの偏見を示したものではないことを言っておきたかただけだ。これは、政府の方からの指示なのだ」

「そう言うことであれば、了解致します。特に私に異論があるわけではありません。わざわざ、ご説明を頂き、感謝の極みです」
一体、では、何のために呼び出したのか……釈然としない思ひだつた。亡命前、この国は身分の差のない『自由の国』だと聞いていた。実際には、言葉とその意味について色々読み替えのための辞書が必要だということが、やっと分かつてきたところだつた。

グレイチェン……実際にはグレートヒエンと呼ばれる方が好みなのだが、通常はグレイチェンと呼ばれることに自らを馴らしているつもりだつた。グレートヒエンという名の響きが余りにこの国にとつての敵国を連想させすぎる。この国に馴染むためには、多少の違和感も敢えて甘受する以外にない。名字のヘルクスハイムにしても、もう少しこの国に馴染む名前への改名も考えたのだが、余りに変えてしまつと自分の名前でないよつな気がして、ほんの少し変えただけに留めてしまつた。

「よいご判断だと思ひます、グレートヒエンさま」

友人であり後見人であるヴェンツェル・ハイブリッヒも、彼女の判断を支持してくれたことではある。ただ、彼女に対する呼び方だけはどうにも容認しかねるところだつた。

「その、グレートヒエンさまというのは止めないか、ヴェンツェル。さもないと妾もそなたのことを、ヘンドリング殿と呼ばねばならぬ」

「グレートヒエンさま、お言葉が……」

「あ、そうじゃつた……ではない、そうだつたな」

異国の言葉を学ぶには若い、いっそ幼い内からの方がよいと言

う。彼女がこの国の言葉を学び始めたのは一一歳の時で、それからの時の流れは僅かに七年に足らない。今でも気を緩めれば、口を衝いて出てくるのは故国の言葉であることが遙かに多いのだ。

「不自由なことだ。大帝陛下……いや、ルドルフも面倒なことをしてくれだ。どうして、わざわざ公用語を変えるようなことが必要だったものだろうな」

銀河帝国初代皇帝ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムは、彼の遠祖の出身地である、地球のとある一地方　しばしば、古ゲルマン地域と呼ばれる　の言葉を、帝国に於ける公用語と定めた。

「最初の内は宮廷内だけでの、言ってみれば宮廷語であつたと聞いていますが」

これは帝国時代の知識ではない。彼女の後見人たるヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリングは、この国に亡命してきた時には既に正規の帝国軍少佐だつた。ゆえに改めての士官教育は必要はなかつたのだが、どういう伝手を使つたのか、いつの間にか士官学校の聴講生のような形で、彼女の傍らに身を置いてくれたのだ。

もつとも、あれに先に気づいたのは彼女の方だつた。閉鎖された、戦史研究科の膨大な蔵書を整理した目録がそれだつた。伝統的な図書コードのみならず、独創的とも言える数十種類の力テゴリによるクロス形式の索引が付され、戦史研究科の廃止後に流出した蔵書についても、その大半の行き先がトレーヌされていたのだ。

「それにしても馬鹿なことをする」

一一歳以降の人生において我が母国語とすべき言葉を学び、この国の慣習に馴れ、そして一人前の士官となるべく士官学校とし

ての学業と訓練に勤しむ。暇であるとか退屈であるとかいふ言葉からはほど遠い生活を送りつつも、グレーチエンはそう感想を抱かざるを得ない。

「なぜ、戦史研究科を廃止したりしたのか？」

「予算の逼迫で、さしあたり必要でない学科を閉鎖した　そういうことのようにです」

当初、ヴェンツェル・ハインリッヒは彼女よりも言葉に不自由が少なかった。どこから聞き込んだものか、戦史研究科の閉鎖がこの目録を生む結果になつたことを聞き出してきたのだ。

「当時、戦史研究科の生徒だつた何人かが学科廃止反対の活動を起こしたそうですが、これは認められず、士官学校生徒の身分で政府の命令に抗した罰則として、この目録作成が命じられたそうです」

「ご存じですか　声を潜めてヴェンツェル・ハインリッヒが

告げた名前に、さすがにグレーチエンも目を丸くした。ヤン・ウエ

ンリー、ロベール・ラップ、そしてダステイ・アッテンボロー。ロベール・ラップという名は初耳だつたが、他の二人の名を知ら

ずにこの国で暮らすのは不可能だつた。

「それは　反対する方が正しい。まして、処罰するなどもつてのほかではないか」

戦術と言ひ、戦略と言ひ、いずれも経験科学としてのみ成立する、というのは僅かでも用兵に興味のある人間なら常識以前の知識と言つていい。

「興味のない人間にとつては自明ではありませんまい。帝国でも、しばしば、文学、史学といった学科を高等教育から廃止しようとする動きがあつたやに聞きますから」

「そももあるだろうな、わたしにしても、これらの本を読んでい

なければ、こんな偉そうなことは言えるものではないから

それにしても、この国は本当に大丈夫なのかな。いささか心配になつてきた」

「後悔なさつて居るのですか？」

「もはや父上も母上もおられぬ。今更帝国に帰れるはずもない。せめて、膝に猫を乗せてうたた寝ができる歳になるくらいまでは、この国にももつてもらわないと、何のために亡命してきたのか分からないではないか」

「グレートヒエンさまの花嫁姿も見ぬ内に戦死というのもご免蒙りたいですからな」

「からかうな、ヴェンツェル・ハインリッヒ。それに話がずれてゐるぞ。それに、いい加減にグレートヒエンさまというのは止めてくれないか」

戦争理論というものが、経験学としてのみ成立するはずである以上、戦史研究を欠くことは、池に注ぎ込む水をすべて封じるに等しい愚行である。池は激み、濁り、腐敗し、汚泥の中にその生命を失う。同様に同盟軍の戦略研究は教条化し、硬直化し、愚にもつかない『奥義』を伝承するに過ぎない『家元組織』へと墮してしまふ。

帝国にあの金髪の覇者

ラインハルト・フォン・ローエン

グラム が現れてこの方、ヤン・ウエンリー以外の誰も帝国軍に対して勝利と呼び得る何かしらを得ていない。その事実が、同盟政府と同盟軍の愚昧さを示して余りあるのではないか。

グレーチェンの辛辣な瞳の色に気づいたらしい。ヴェンツェル・ハインリッヒが穏やかに頭を振つてみせる。

苦笑し、グレーチェンはそれ以上の論評を口にするのを避けた。

「まあ、確かにヤン・ウエンリー大將は偉大な用兵家だといつこ

とだ。それだけは納得せざるを得ないな」

一介の士官学校生徒の身分で、同盟軍最高の智將をそう論評してから、グレーチェンは思いを最初に引き戻した。

そう言語のことだ。ルドルフ以前、銀河連邦では、おぼざつばな分類ですら三〇〇〇を超える言語が使われていたという。無論、現在の同盟公用語のベースとなつた言語は、当ても事実上の標準語として広く使われていたというのだが。

一方、ルドルフが帝国公用語と定めた言語は、三〇〇〇の言語の内の一つと言つて過ぎず、決して当時の人類の多くが操り得る言語ではなかつた。それを強引に公用語化したのは、まさにルドルフの節度も際限もない自己神聖化の一環といふべきであり、更に言つならば晩年のルドルフを覆つた知的衰弱を示す証左に他ならないのだらう。たとえ、最初が宮廷語であつたとしても、人類の唯一の統治者を名乗る人物が、それを公用語と定め、それを操れねば二級市民に格下げされると言われれば、他の言語が衰退するのは目に見えて居るのだから。

ただ、若き日のヤン・ウエンリーがせつせとまとめてくれた書籍を辿るならば、かつての三〇〇〇の言語の相当部分は、まだ帝国の有人惑星や同盟領の一部に残されてゐるらしい。

ついでにグレーチェン自身の言語能力を言つたら、人並み以上には恵まれた資質は持ち合わせていたらしい。それと一歳と言つた年齢は、彼女にとって新たな言語を学ぶに遅過ぎはしなかつた。今では、ヴェンツェル・ハインリッヒよりも同盟公用語に堪能なグレーチェンである。そうして、余暇のあるごとに、あるいは無理矢理にでも時間を作ってヤンの目録を辿りつつ、いつかはこの目録の作成者に面識を得たいものだと思つてゐるのだと思つた。

「ミス・ヘルクスハイム」

硬質な声。振り向く前に、その声の主の見当は付いていた。

左足を軸に右回りに身体ごと振り向く。模範的な右向け右を終えると、至近の距離に声の所有者に相応しい、頑丈な体躯が視界一杯を占めていた。

「何かご用、ミスター・ブラントン」

「詫びておきたいことがある」

ティフリー・ブラントン　グレーチェンと戦略研究科首席を争う、彼女の同期生は、前置き一切を省いた。

「何の？」

答えるグレーチェンの言葉も短い。

同期生、そして、どうしてもライバルとして意識せざるを得ないが故に、グレーチェンもブラントンの家庭状況には通じていた。祖父の代から続いた同盟軍高級士官の家系。祖父も父も提督の称号を帯びる地位にまで昇った。祖父のブラントン准将はアッシュビー元帥の麾下で第二次ティアマト宙域会戦を戦い、その後、中将で退役。父親のブラントン少将も最終階級は中将だったが、それはアムリッツアでの戦死に伴う死後昇進によるものだった。祖父の跡を嗣ぎ、父の復讐を果たす　それがブラントンの口癖だった。

戦史研究に関するスタンスから分かるように、戦略・戦術に対して柔軟で、彼女を中傷する者に言わせれば『節操がないほどになんでもあり』なグレーチェンである。その彼女から見ると、ブラントンは戦史研究科を廃止した同盟軍そのものの考え方の悪しき体現者に偏しているように見えた。よく言えば生真面目、悪く言えば視野に余裕が少ないのだ。戦場を限定した戦術シミュレーションではグレーチェンとは互角か、或いはそれ以上の戦いぶりを示すのだが、より戦場が広くなると、彼女にあっさり奇襲を

許したり、補給を叩ききられたりと良いところがない。

ティフリー・ブラントンという個人に対しては、それでも、グレーチェンは悪意を持ってはいない。生真面目な人物であり、得難いことに公正だった。帝国からの亡命者、それも帝国の支配階層に近い身分の出身者ということで、グレーチェンに偏見と疑惑の視線を向ける同盟人は少なくない。むしろ、大半がそちらの方に分類されると言っても良いくらいだ。

良くある図式なら、ブラントンの周囲にはいわゆる取り巻きの連中が付き、ことあることにグレーチェンを目の敵にして陰湿極まる虐めや嫌がらせを繰り返す、ということになる。そして、事実はその通りだった。少なくとも取り巻きについては。

「おめでとう、ブラントン！」

「同期の誇りだぜ」

「やっぱり卒業生総代は生粋の同盟ツ子じゃなきゃ。帝国のお貴族様のお嬢様なんか、お呼びじゃねえってことさ」

めざとい連中だ。ブラントンが声をかけ、グレーチェンが立ち止まってからまだ一分と経っていない。もう三、四人の、ブラントンとさして上背の変わらない、でかい男たちがグレーチェンの周りに人の壁を作り始めている。彼女も女性としては背の低い方ではないが、圧迫感を感じて頬を強ばらせる。彼らの表情には一様に、二重の意味での侮蔑が浮かんでいる。一つは、『祖国を裏切った逃亡者』としての亡命者への蔑視。今ひとつは、きつい容貌ながらも育ちの良さや女性らしさを隠しきれないグレーチェンの容姿に対する侮りである。

彼女がラインハルト・フォン・ローエングラムならば、視線の形をした炎の箭で彼らの面上をなぎ払い、侮蔑の表情を一瞬に畏怖のそれに変えることも叶っただろう。しかし、残念ながらグレーチェンはラインハルトではないし、また彼らを睥睨できるほどの

体軀にも恵まれてはいなかった。

「余計なこととは言わなくて良い!!」

「ブラントンの声が硬質な鞭を思わせて通路に響き、彼の『取り巻き』たちの表情を横殴りにした。」

「グレーチェンがブラントンを評価する所だった。彼は取り巻きを取り巻きと思っていない。単に追従や阿りが通じない堅物と言っただけなのかも知れないにしても。もっとも、それゆえブラントンは希少価値を主張できる存在なのではないかと思っただけだ。物心ついてからの彼女の視界に入ってきた人物の九割以上は、ブラントンのタイプではなかったのだから。」

「それで？」

「卒業生総代の件だ。席次から言えば総代の名誉は君のものであるべきだったはずだ」

「今、シエフェール中將から言い渡された。それが命令なら、私に異議はない。謝ってもらおうようなことは何もないと思う」

「だが、決まりは戦略研究科首席生徒が総代を務めることになっている。これは規則と慣習を破る行為だし、その結果として名誉を代わりに受けることになるについては詫びが必要だ」

「気にするなと言って気にしないようならブラントンではない。グレーチェンの珊瑚色の唇が苦笑する形に動いて、皓い歯が覗いた。」

「その詫びは受けます」

「途端に『取り巻き』の一人が親指を地面に向けてブイイングをしたが、ブラントンの一瞥に射竦められるように慌てて姿勢を正した。」

「無視して、グレーチェンは言葉を継いだ。」

「そして私からもお祝いを言わせてもらおう。決まりを破ってとか、

代わりだとか言うけれど、それを受けられる立場に自分を置けたのも、あなた自身の努力の結果だと思えばいい。謂われなく受けた名誉ではないと胸を張って欲しい」

「詫びを受けてくれたことに感謝する。それと、これは知っておいて欲しい。昨年度の卒業生総代はミスター・クリストフ・ディッケルだった」

「ディッケル？」

「そうミスター・ディッケルだ」

「それで話は済んだ。ブラントンはさっと右手を挙げて敬礼する。それ以上、話を続けるつもりはないようだったから、グレーチェンも敬礼で応じた。」

「歩み去っていくブラントンを見送りながら、グレーチェンは彼が最後に告げた名前を脳裡に反芻する。」

「クリストフ・ディッケル」

「彼女同様に帝国からの亡命者で

あり、苦学して士官学校に首席入学した人物だ。二年前、議長就任式典で、ヨブ・トリューニヒト議長自ら『同盟青少年栄誉賞』を授けられたことは、彼女の記憶にも新しい。あの時、トリューニヒト議長自らが受賞者たちと肩を組んで『おお、我ら自由の民!』と合唱する映像を目の当たりに、帝国との国柄の違いに目を瞠ったものだ。少なくとも、帝国では皇帝陛下みずからが平民を表彰し、肩を組んで帝国国歌を歌ったりはしない。」

「そこで思い当たることがあった。士官学校卒業生総代を亡命者が務めることを忌避する勢力が、『上の方』、つまり同盟政府の首脳の中にあると言っただろう。ディッケルのケースは、彼が『同盟青少年栄誉賞』を得た点で、言ってみればトリューニヒト議長のお気に入りという扱いで忌避を受けることも少なかったのだらうけれど。」

「何が自由の国なのかしらね。何が、信条や出身で処遇を左右されることはない、だっていうのかしら」

帝国を離れたのは一歳の時だったから、帝国がどんな国だったのかはよく分からない。ヴェンツェル・ハイブリッヒが時々漏らす言葉を継ぎ合わせると、余り良い国ではなかったような印象がある。無論、士官学校が教えるような『悪の巢窟』だったかどうかについては意見を留保するにしても。

そうした経緯の後、グレーチエンは士官学校卒業式の式場にいる。

シエフェール中将による挨拶、そして在校生、つまり一年生と二年生からの送辞に応じるブランドンの答辞もさして強い印象は残さなかった。

「我が自由惑星同盟軍の誇りとも言うべき士官学校の卒業式に臨席がかない、同盟評議会議長としての名誉、これにすぐるものはありません。卒業生諸君の門出に際し、こうして祝辞を述べる機会を得られたことを、国父ハイネセンに対し心より感謝の意を表するものであります」

式の最後近く、颯爽と登壇したトリューニヒト議長の訓辞も、グレーチエンには今ひとつ真実味を帯びて聞こえなかった。初めてその姿に接した時は、帝国で接したことのない若々しい風貌と、歯切れの良い、張りのある語り口に、なるほどここは自由の国なのだ、などと思わず納得してしまったこともあったのだが

「諸君もご存じの通り、現在、我が国を取り巻く環境は決してすべてが順風と言えるものではありません。ここ数年の軍事的な失

敗により、我が国の国防力は過去百数十年でも例のないレベルにまで低下しており、また、帝国においては新たな脅威たるラインハルト・フォン・ローエングラムが台頭し、新たな覇権体制を確立しつつあります。そのような中、同盟の粹たる諸君が、今やまさに士官学校のこの学窓より征途につき、アーレ・ハイネセンの理想、グエン・キム・ホアの献身、そして無数の先人たちの功業を引き継ぎ、若き身を宇宙の大義と自由のために献じようとしているのであります。これを壮途と言わず、何と評するべきでありましょうか」

両腕を大きく広げて演壇につき、トリューニヒトは一際声を張り上げる。

これだ　とグレーチエンは思う。トリューニヒトが同盟の建国者たちを讃え、他者の献身を賞賛する下りになると、何故か嫌な気分になる。そうなって久しいのだ。この同盟元首は、どうしていつも、他者には自己犠牲を強調するくせに、自らが祖国のために何をしてもりなのかを述べようとしないのだろう。

「私は信じるのであります。心より信じるのであります。諸君の献身は必ずや、憎むべき仇敵、銀河帝国を打ち破り、この宇宙から圧政と専制の闇を吹き払い、星という星総てに自由の旗を立てる日を迎え入れてくれるであろうことを。同盟万歳！ 共和国万歳！ 帝国を倒せ!!」

トリューニヒトの絶叫に同盟国歌の吹奏が重なる。士官学校の教官と生徒、来賓が一斉に立ち上がり、ベレーを放り上げ、国家を斉唱する。

ひどい違和感を覚えつつも、グレーチエンも立ち上がった。三年間の士官学校生活で同盟国歌は頭にたたき込まれた。声を張り上げる気はしないが、それでもとにかくメロディを辿ることはで

きる。

歌いながら、ふと思い出した。二年前、アスターテ戦没者記念式典。士官学校入学直後の彼女もまた、あの場にあり、同じように興奮と国歌の渦に巻き込まれる群衆の中、一人の女性の手を引いて退場していった人物を見下ろしていたことを。それが、ヤン・ウエンリー……現在の同盟軍大将であることを後に知った。

「同盟は諸君の献身を決して無駄にしない。謀略なる帝国を倒し、宇宙にアーレ・ハイネセンの理想をあまねくするがために、私もまた一人の戦士として戦場へ赴くことを決して躊躇ためらわな
いでありましょう!!」

トリユーニヒトの絶叫が更に続き、一層大きなどよめきがそれに答える。同盟万歳、共和国万歳、トリユーニヒト議長万歳の声が波のように繰り返しわき起こり、式場の空気をわななかせるかのようだ。

珍しいことを言うものだ　どこか醒めた声がグレーチエンの脳裡に囁いた。あのトリユーニヒト議長が自らの献身を口にするなんて。本当に元首が戦場に出るようでは、同盟も終わりだろう。でも、本当にそんなことになったら自分も戦場に出るつもりだろうか？